

榎屋 友子

賞 鑑 術

地中海東岸から北アフリカなどでは石の壁面を持つ建築が多い。石は磨いて表面を滑らかにすることができ、彫刻して立体的な浮彫り装飾を施すこともできる。着彩による装飾もあるが、石本来のもつ色や模様をそのまま活かすような装飾技法に工夫を凝らしてきた。

メスキータと呼ばれる世界遺産、コルドバ（スペイン）の大モスクは、煉瓦と石の赤白交互に配置した通り石から成るアララックのアーチ列をもつ。

異なった色の石の小片をパネルに即して整形し、石の隙間に象嵌して文様を表したり、天然の縞模様が入った石の板を模様が対称形になるように並べたりする装飾法もあるが、イスラム建築に独特の、最も印象的な石の装飾技法の一つにアラブラクがある。

イベリア半島は8世紀初頭にイスラムに征服された。同世紀末にモスクが創建された際、既存の複層の建築物の柱を略奪・転り石を採用した。大モスクは11世紀初頭まで数次の拡張を経たが、増

モスクを飾る縞模様「アラブラク」

幻想的な色の対比

赤白アーチの森

アラブラクはアラビア語で「まだらの、縞の」という意味で、色の異なる石同士や煉瓦と石を交互に並べて色彩による装飾効果を生み出す。組織造の壁面にアクセントを加えるために地中海沿岸地域で古くから用いられていた、水平方向に石積み層と煉瓦積み層を交替させながら積み上げていくやり方由来すると考えられるが、イスラム建築ではアーチの通り石などに適用されているのが特徴だ。

スルタン・ハサン・モスク、アラブラクのミフラーフ（14世紀）―深見奈緒子撮影

築部分でもこの色2層のアーチ列が踏襲された。その結果、アーチ列が無制限に広がっているかのような錯覚を観る者に与え、赤白の

拜の方向を指し示す壁龕ミフラーフ上部のアーチでは、石の接続部分の輪郭が直線ではなく凹凸の多い曲線になっていたり、幾何学的図案の一部に取り込まれたりすることもある。

14世紀中葉にエジプトのマムルーク朝君主ハサンがカイロに建設したスルタン・ハサン・モスクは、4層建ての巨大建築で、礼拝を呼びかけるための尖塔ミナレットは80層ほどの高さだ。礼拝室に設置されたミフラーフは、黒白、茶色、ベージュなどの大理石を通り石とした内外二重のアーチで形成されている。

入手困難であらうと切り出し、石を微妙な形に切り、立体的に組み合わせるという驚くべき技術が、モスクの中で最も大切な部分に施されている。君主の権力の大きさは建物の高さだけでなく、装飾の繊細な美しさに象徴されているのだ。（東京大学教授）



アラブラク装飾は幻想的な雰囲気を作り出し、空間をより一層引き立てている。モスクであるにもかかわらず、キリスト教徒による再征服（レコンキスタ）後も壊されずに現代まで残された事実上、スペインの人々のこの建物に対する敬意の念を感じずにはいられない。

大建築の繊細さ

13世紀以後のシリアやエジプト、トルコ中部では色の違う大理石を使用したアラブラクが見られる。建物の入り口のアーチや横材礼